

教員養成学部学生にとっての“人生上の危機”克服
の失敗体験が持つ意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 康哉, 原田, 唯司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025359

教員養成学部学生にとっての“人生上の危機”克服の失敗体験が持つ意味

Investigation on the Unsuccessful Experience to Overcome Serious Hardship
in Life for the Students in Teacher Education

岡本康哉・原田唯司
Kosai OKAMOTO & Tadashi HARADA

（平成29年10月2日受理）

キーワード レジリエンス 挫折 ストレス・コーピング 情動焦点型 問題焦点型
対処行動

問題と目的

「失敗経験があった方が良い先生になれる」とよく言われる。失敗経験が子どもへの共感的理解に結びつくと考えられるからである。では、教員養成学部学生は、実際にどのような人生上の失敗経験をもっているのだろうか？そして、それが本当に自分にとって意義あるものと感じているのだろうか？本研究は、人生上の失敗経験、すなわち「これまでの人生において乗り越えることが出来なかった経験」、いわば「人生上の危機」に直面して苦難を感じた経験が、教員養成学部学生が教職への志を形成する過程でどれくらいの有用性を持っているのかについて検討する。

人生上の危機と感じられる事態に遭遇し、即時解決がなされないままの状態が継続すると、我々は、自信喪失や自己に対する疑念、無力感といった様々な否定的感情に直面することになり、強い精神的ストレスを抱えたまま苦痛の日々を送らざるを得ない。こうした困難さを乗り越えてどのようにすれば自己の安定感が維持あるいは確保されるのか、各個人が否定的感情からの回復を求めてそれぞれ固有のやり方で困難事態に対応しようとする。こうした対処行動を生み出す力は一般にレジリエンスととらえられるものであり、困難事態に対抗し、精神的安定の回復を目指して粘り強く適切で効果的な対処行動を探索し、実践する力量を形成することは、児童生徒の人格の成長を支援する教師として身に付けておくにふさわしい能力の一つであると言える。レジリエンスは東北大震災以来、「逆境からの回復力」として注目を浴びている概念である。

本研究では、授業づくりや学級づくりなど教師が担う重要な教育実践活動を遂行する力量をレジリエンスの力の獲得という視点を組み入れた形で編成することが可能ではないかという課題意識を出発点として、レジリエンスは実際のところ、どのような形成の過程をたどるのか、どのような逆境状況に対してどのような対処行動が採用されてきたのか、などに関するデータを将来教師を目指している教員養成学部学生を対象に収集し、分析することを目的とする。具体的には、これまでの人生において逆境体験を少なからず持っていると考えられる学生を対象

として、今までに遭遇した逆境体験を振り返る中で、そのときに感じたことや、その体験が有効であったかについての自由記述を求め、どのような逆境体験をどのように克服しようとしたのか、現時点ではそうした経験をどのようにとらえているかなどを明らかにする。この作業を通して、逆境体験克服に有効な対処行動の一端を知ることができるとともに、困り感を抱いている児童生徒を逆境に苦しんでいる児童生徒ととらえることによってそうした状況に至っている児童生徒に対して教師が行うべき有効な支援に活用できる手がかりが得られるであろう。

方法

- (1) 調査対象：静岡大学教育学部に在籍する3年生95名（男子：27名）（女子：68名）である。
- (2) 調査日時：2016年12月に教職科目「生徒指導」の授業時間の一部を割いて自由記述形式による質問紙調査を行った。調査に先立ってレジリエンスに関する講述を1コマ分実施し、レジリエンスとは何かについて具体例を含めて紹介を行った。したがって、調査対象者の回答は、概ね前回の講述内容を踏まえての回答であると推定される。
- (3) 調査内容：質問項目は以下の4点である。調査対象者によっては、複数有している場合もありうるが、今回はこれまでの体験の中で最も重要であると思われるできごと1つに絞るよう依頼した。

- ①「これまでの人生で乗り越えられなかったことは何か」
- ②「その時感じたこと」
- ③「どのような対応をしたか」「その対応は有効だったか」
- ④「それは、今の自分に役立っているか」

調査対象者には、個人を特定しないこと及び調査結果は学術的な利用以外には用いないことの2点について口頭で了解を得た。なお、両方の自由記述を合わせて15分以内に回答するよう求めた。

- (4) 分析の方法：まず、調査対象者が記述したできごとと支えた力とを一つのセットとしてカードに転記し、次に、できごとの内容に基づいて心理学が専門の大学院担当教員とともに合議に基づく分類作業を行った。さらに、分類された結果を、ストレス・コーピングの分析表（1994、尾関・原口・津田）を手掛かりとして一覧表の形に整理した。

結果

(1) 「これまでの人生で乗り越えられなかったこと」の内容の分類

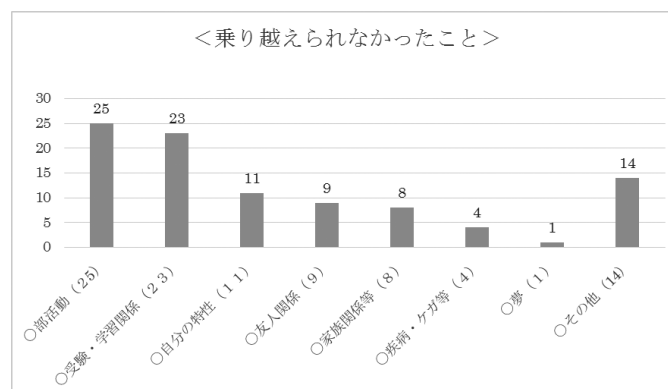


Fig.1 「乗り越えられなかったこと」のカテゴリー別出現度数

まず、今までの人生で乗り越えられなかったことを内容に基づいて分類し、カテゴリー名を与えたところ、出現度数の順に、「部活動」「受験・学習関係」「自分の特性」「友人関係」「家族関係等」「疾病・ケガ等」などが挙げられていた (Fig. 1)。

各カテゴリーの具体的な記載内容 (抜粋) は以下の通りである。

Table 1 「乗り越えられなかったこと」(部活動) の例

<p>①人間関係</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活動の人間関係 ・いじめにあったこと <p>②失敗体験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・試合で一勝もできなかったこと ・部活動 (吹奏楽) のコンクールで失敗して吹けなくなったこと <p>③力不足</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団体戦のメンバーに選ばれなかったこと ・部活の練習がきつくて抜け出したこと ・中学の部活動で外周を走るのをさぼったこと ・部活動で緊張のあまり上手くいかない <p>④断念</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部活動を辞めたこと, 続けられなかったこと ・部活動と勉強の両立

内容的に類似したものをまとめると、「部活動」に関して「乗り越えられなかったこと」は、「人間関係」「失敗体験」「力不足」「断念」などに分類可能であった (Table 1)。「人間関係」は、いじめなど部活動メンバー間の感情的軋轢に関することからである。「失敗体験」は対外試合などでの挫折経験を表し、「力不足」は目標とする地位に到達できなかった経験に関連している。さらに、病気やケガ、受験勉強など部活動の継続を妨げる事態が発生した結果として部活動を「断念」せざるを得なかった経験も指摘された。

次のカテゴリーは、「受験・学習」である (Table 2)。

Table 2 「乗り越えられなかったこと」(受験・学習) の例

<p>①進路の迷い・進路変更</p> <ul style="list-style-type: none"> ・志望校が明確にできなかった ・志望大学を変えたこと ・一番行きたい大学ではなかった ・教育関係ではなく、医療関係に進みたかった <p>②不合格経験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校受験で第一志望が不合格だったこと ・大学受験で前期試験に落ちたこと ・高校受験で公立が受からなかった
--

③入試成績不振

- ・センター試験で得意科目に失敗
- ・センター試験で、目標点に届かなかったこと
- ・国語の点数が伸びなかった

④学業成績不振

- ・学業成績の不振
- ・高校の物理がとて苦手
- ・高校時代から「歴史」への苦手意識

このカテゴリーに含まれる回答は、内容的に「進路の迷い・進路変更」「不合格経験」「入試成績不振」「学業成績不振」などに分類可能であった。「進路の迷い・進路変更」は、とくに大学受験に関して希望する大学への進学が何らかの事情によって妨げられた経験に関連している。「不合格」はより直接的な受験での失敗経験である。また、「入試成績不振」は上級学校への進学可能性に深く関わる入試成績が目標通りではなかった経験を表し、「進路の迷い・進路変更」及び「不合格」経験の直接的原因を構成している。さらに、「学業成績不振」は日常の学習活動の成果が期待通りではなかったことを指している。

また、自分自身を「乗り越えられなかった」対象として挙げている例も見られた。Table 3に示すように、自身がとらえるどちらかと言えば否定的な内面的特性であったり、失敗・挫折経験あるいは自分が設定した目標の未達成状態に対する自分自身との対峙を表す内容がほとんどを占めている。

さらに、「友人関係」や「家族関係」に代表される人間関係で「乗り越えられなかったこと」を指摘した学生もいた（Table 4）。「別離・仲違い」「対立葛藤」など自分の思い通りにならない経験が「乗り越えられなかったこと」として受け止められている。

以上から、今までに乗り越えることができなかった体験は、内容的に部活動、成績、自分自身および人間関係の4つの領域から成り立っていることが分かる。

Table 3 「乗り越えられなかったこと」（自分自身）の例

①自己の否定的特性

- ・自分の悪いところを直そうとしている
- ・口に出して言えないこと
- ・言い返すことができない（笑っている）
- ・自分から話しかけたり自分が言いたいことが言えない
- ・人見知りが克服できない

②目標未達成

- ・だらしない生活習慣からの脱出
- ・教育実習で最終週で何も考えられなくなったこと
- ・大学生活で目標に取り組んでないこと
- ・教育実習で生徒と関われなかったこと

Table 4 「乗り越えられなかったこと」(人間関係) の例

①友人関係
・失恋
・友達との離反
・交友関係を続けることが出来なかったこと
・中学校時代の友達関係（はぶかれること）
・サークル内での人間関係
②家族関係
・親との関係（親子の溝）
・親の圧力（進路を決めつけてくること）
・兄を乗り越えること
・両親の不仲
・父親がいないということ

(2) 「乗り越えた経験」との比較

なお、岡本・原田（2016）は今までの人生で乗り越えたことについて、同様の方法・対象者を用いて調査した結果を示している。今回の分類カテゴリーとは一致していないが、乗り越えあるいは乗り越えられなかった経験の対象領域に相違が見られるかどうかを回答の出現率で比較した（Table 5）。

Table 5 乗り越えた体験と乗り越えられなかった体験の出現率の領域別比較

<乗り越えられなかったこと>	<乗り越えたこと>
○部活動（27%）	→部活動（19%）
○受験・学習関係（24%）	→受験（30%）
○自分の特性（12%）	
○友人関係（9%）	→人間関係の転機（5%）
○家族関係等（8%）	→家庭生活（11%）
○疾病・ケガ等（4%）	→疾病など（6%）
○夢（1%）	
○その他（15%）	→その他（26%）

双方の結果を比較すると、「部活動」に関しては「乗り越えたこと」よりも「乗り越えられなかったこと」の方が出現率が高いように思われる。また、「乗り越えられなかったこと」のみ「自分の特性」というカテゴリーが出現した。

「部活動」は、自分の技量の巧拙が部内の地位の上下に直接的に関連し、ライバルの存在や集団競技の場合にはチーム内の序列など対人関係の在り方とその中での身の処し方に多大な労力を伴う、児童生徒や学生にとって「そこでうまくやること」が求められる活動の場である。メンバー間の軋轢がときにいじめや社会的排斥につながる可能性もあり、そこでの失敗や挫折

経験は一人ひとりの学校生活へ適応や人格形成に大きな影響を及ぼす。技量や体格、過去経験など個人にとってはコントロール不可能な要因が部活動内の人間関係の特質に直結するだけに、様々な形で逆境状態として認識される経験が乗り越えた経験よりも多く発生する可能性が大きいと考えられる。

また、「自分の特性」というカテゴリーが「乗り越えられなかった」経験として出現したことは興味深い。具体的な記述内容を見ると、「人見知り」や「言いたいことが言えない」など「自分の悪いところ」を克服しようと努力してもなかなか変えることができない苦しみやつらさが表現されている。「部活動」の場合と同様に、自身の努力だけでは望む方向に状況や関係性を変化させていく可能性は、皆無ではないものの確率的にはひじょうに低いことが想定できる。このように考えると、「部活動」で示唆された対人関係と「自分の特性」に関わって「乗り越えられなかったこと」とともに、自分の要求と現実状況とがつねに矛盾あるいは対立葛藤し、しかもそれが果てしなく続く現在進行形の困難である点で共通性を認めることができる。同時に、部活動における人間関係と自分の特性とはともに、自身の意志的な努力だけでは変更しがたい“自力でのコントロール不能性”ともいうべき性質を持っていることも共通している。これらは、いわば解が見当たらない持続的不安定状態に各個人が飲み込まれているという意味で、極めてストレスフルな状況での生活を強いられることを示唆している。持続する解のない不安定な状況に対してどうすればこのような状況をより好ましい方向に変化させることができるのか、解決の見通しが明確ではない中での精神的な高負荷状態にどのように折り合いをつけて行くのか、困難状況に伍して何とかまい解決の道を探ろうとする姿勢は、優れて「レジリエンスの力」に密接に関連する特質であるように思われる。

(3) 「その時感じたこと」の内容分類

次に、「その時感じたこと」について、「ネガティブ」と「ポジティブ」とに分類したところ、予想されたように、「ネガティブ」(88%)の割合が高かった。やはり、「乗り越えられなかった」失敗・挫折体験を想起させているために、ネガティブな気持ちになるのは当然であろう。

次に「ネガティブ」と判断された記述をその時に感じた否定的感情の種類に着目して分類を行った。まず顕著に認められるのが、「不安」「怒り」「憎しみ」「悔しさ」「悲しさ」など「乗り越えられなかった」経験の直後に生じたであろう否定的な感情反応である。同時に、例えば、「私には良いところなんて無いんだ。何の価値もない人間だと思いました。」という記述に典型的に示されるように、そういう状況に至った自分自身を見つめ、振り返り、反省し、自分の至らなさや弱みを自覚する契機となったことをうかがわせる回答である (Table 6)。

本研究では、過去の体験を想起させて現時点における「乗り越えられなかったこと」を再評価させているために、当時の直接的感情反応だけでなく、その経験を振り返ってみて現時点でどのようにとらえているのか、いわば過去経験を対象化した記述が含まれている。こうした、現時点での過去経験の振り返りを通してその経験を意味付けしていると思われる回答の多くは、失敗や挫折といった逆境をもたらした主たる原因を自分自身に求め、自分を戒め、今後はそうした困難状況を回避するために自らを律するといった決意に関わる内容で占められている。

このことは、「不安」や「怒り」など「乗り越えられなかったこと」の発生直後の強い否定的感情だけではなく、困難状況に遭遇したことが自分自身の在り方を問い直し、あらためて自分自身を理解する契機となり得ることを示している。

Table 6 「乗り越えられなかったこと」経験後の反応

	ネガティブ	ポジティブ
直後の感情反応	不安でいっぱい 怒りや憎しみ, 心苦しさ	何とかなる うれしかった
自己の振り返り	自分には良いところがない 自分に絶望	自分を知ることができた 自分には向いていないと判断した

(4) 「その時の対応は有効だったか？またどれほどどんな対応だったか？」の内容分類

次に、「乗り越えられなかったこと」の経験後にどのような対処行動に取り組んだか、また、それらが有効であったかどうかについての回答を分析した。Table 7 は、対処行動が有効であったか有効ではなかったかの回答別に、どのような内容の対処行動であったのかを機能ごとに分類した結果を示す。対処行動の機能分類については、Folkman & Lazarus (1984) による「問題焦点型コーピング」と、「情動焦点型コーピング」の分類を手がかりとした。「問題焦点型コーピング」とは「ストレスを取り除くことが目的であるのに対して、「情動焦点型コーピング」はストレスによって引き起こされた怒りや不安などの低減が目的とされる。

Table 7は、有効／非有効と問題焦点型／情動焦点型という4つの区分ごとに代表的な回答を示したものである。得られた回答は、筆者間で合議・調整し、分類不可能な回答は除外した。

Table 7 有効／非有効別に見た対処行動（代表例）の機能別分類

	有効	非有効
問題焦点型	○部活でなく勉強に集中 ○環境を変える（塾に行く） ○受験先の変更 ○逃げずに取り組んだ ○最後の最後まで練習を続けた ○調べたり，相談した	○自分の弱さから逃げた ○回避した ○やめた ○あきらめた ○いろいろな人に相談した ○友だちからアドバイスをもらった
情動焦点型	○できない自分を認める ○プラス面だけを思い浮かべた ○受験は壁ではなく次の道だと考えた ○別なことに目を向けた ○つらい気持ちを他者に打ち明けた ○先生に話して共感してもらった	○自分の心の中に丸め込む ○練習を止めていることに理由をつける ○周りを楽しませることを第一にする ○逃げ込む ○時間に任せる ○ただ耐えた

「問題焦点型」対応で有効であったのは，“部活でなく勉強に集中”，“環境を変える（塾に行く）”など、「課題の切り替えや転換」，“逃げずに取り組んだ”，“最後の最後まで練習を続けた”など、「継続的な努力」と解釈可能な対処行動であった。

「乗り越えられなかった」経験の性質に応じて、そのまま努力を継続するか、それとも課題を切り替えて乗り越えやすくする状況を新たにつくり出すのか、「問題焦点型」の対応を行った者からは、どちらの戦術をとる場合でも自ら積極的に対処行動を選択している姿を想定することができる。

それに対して「問題焦点型」と分類可能な対処行動の中で有効ではなかったと振り返っている回答は，“自分の弱さから逃げた”や“回避した”，“あきらめた”など困難状況を回避したり，

あきらめるといった消極的な姿勢を示すものであった。また、「いろいろな人に相談した」、「友だちからアドバイスをもらった」といった対処行動が必ずしも有効ではなかったことから、他者への相談やアドバイスを求めても、必ずしも逆境を乗り越えることには結びつかないことも示唆された。

一方、「情動焦点型」の対処行動が有効であったと回答した者は、“できない自分を認め”たり、“(自分の) プラス面だけを思い浮かべ”るなど、自分が受け入れている肯定的側面に注目したり、“受験は壁ではなく次の道だと考えた”という回答に典型的に示されているように、自分に対する再評価や課題の切り替え・転換を図った内容が示されている。また、気持ちを他者に開示することで精神的負担を軽減しようとする試みを指摘した回答も見られ、否定的感情の吐き出しも有効な対処行動であるとする可能性が示された。

他方、「情動焦点型」の対処行動で有効ではなかったとしている回答の内容を分類したところ、“自分の心の中に丸め込む”ことで抑圧したり、“練習を止めていることに理由をつける”といった合理化、“周りを楽しませる”置き換え、“逃げ込む”逃避など、「乗り越えられなかった」経験から生ずる不安や怒り、無力感などから自分を守るための防衛機制に含まれるいくつかの対処方略を選択していたことがうかがわれた。

ところで、「問題焦点型」の対処行動は、ストレスが具体的かつ明確である場合に、Table 7 に示した回答例からうかがわれるように、課題を切り替えたり、努力の継続といった対応が有効な成果につながりやすいように思われる。しかしながら、ストレスが明確でなかったり、個人のコントロール能力を大きく超えていて、対処行動が目に見える有効な成果を生み出さなかった場合には、回避やあきらめ、他者からのアドバイスに頼るといった消極的姿勢に切り替わり、結局のところ問題の根本的解決に至らないままストレスを多く抱えて過ごすことになる。したがって、「問題焦点型」の対処行動は、効果が部分的であったり、限定されているといった制約条件を抱えていると言えるであろう。

それに対して「情動焦点型」の対処行動は、自分に対する再評価や課題の切り替え・転換、苦しい気持ちの他者への開示などによって、すぐ解決することができない逆境状態にあることに伴う否定的感情を軽減あるいは緩和させ、そのことを通して何とか逆境状態に抗して行こうとする主体的で積極的な姿勢を保つことと関係しているように思われる。

「問題焦点型」と「情動焦点型」のどちらの対処行動が有効であるかは、逆境や困難状況の性質によっていずれとも断定しがたいが、いずれの対処行動を採用する場合でも、「乗り越えられないこと」を経験することによって発生する否定的感情を何とか軽減・緩和するための意図的な努力を探索し、実行するという主体的な姿勢をどのように保ち続けるかということが重要であろう。すなわち、逆境状態に陥ることで発生する目標の挫折や否定的感情の急速な高まりに対抗して、自らを否定的に価値づけするのではなく、自分のいいところ探しや課題の解釈の修正・変更・切り替え、他者に対する苦しさの開示といった方法を駆使しながら、逆境に対峙する自分自身の主体性に確信を持つことが大切である。こうした、「なんとかやりくりする」行動を自らが見つけ出すプロセスには、レジリエンスの力が深く関連していることが推測される。

(5) 「今の自分に役立っているか」の分析

最後に、「今の自分に役立っているか」についての分析結果を下記に示す。「役立っている」(93%)の割合が高く、「役立っていない」(3%)「どちらとも言えない」(4%)であり、圧倒的多数が現在の自分にとって意味ある体験であったと振り返っていることが分かる。

「役立っている」とした理由や背景を「乗り越えられなかった」体験に対して回答者が付与している役割や機能に基づいて著者間の話し合いによって分類したところ、Table 8 のように整理された。

分類カテゴリーの①と②は、「乗り越えられなかった」体験に対処してきたことが自身の成長促進につながる機能を持つことを指摘したものと考えられる。他者との違いや自分の弱点、努力などにあらためて気づかされ、逆境を克服できなくともそれに立ち向かう自分自身を受け入れ、自身の人格の形成に寄与していることを今の時点で振り返ることができていることを示している。

Table 8 「役立っている」と考える理由の分類結果

<p>①自己理解の深化・拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たな場で自分を発見できると考えられる ・他人とは違うことが認められる自分につながっている ・自分の苦手に気付くことが出来た ・「でも、ここは頑張った」と自分の努力を自分で認めることができるようになった ・前より自分を認めてあげられるようになった
<p>②自己形成への貢献</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この体験が自分を形づくる大切な思い出となっている ・子どもの悩みに気づいてあげられる大人になろうとしていること ・このことで、今の自分があると思っている ・失敗してもいいんだと思えるきっかけになった ・自分が一番やりたいことが出来なくても、二番目、三番目のために頑張ることが意味あることだと思えるようになった。
<p>③相対的な見方の獲得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・反面教師として捉えることで、前向きに落ち着いて考えることが出来るようになった ・多くの人が不安を抱えていることが分かった ・このことが全てではないと思える ・たまには妥協も必要と思えるようになった
<p>④視野の拡大・視点の転換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あの経験のおかげで他人の気持ちを考えることが出来るようになった ・ネガティブをポジティブに捉えるようになった。 ・他のルートでの解決策を考えるようになった

⑤持続的努力の大切さへの気づき

- ・今は、頑張ろうと思えるようになったこと
- ・自分の納得するまで努力することを心に留めている
- ・別の目標に向けてがんばることが出来ている
- ・途中ですごく辛くても後のことを考えて頑張ろうと思うようになった

⑥耐性の強化

- ・あんなに辛い思いをしたから、もうこれからは怖いものなしだと思えること
- ・「辛い時があっても、あの時ほどではない」と思って頑張れる
- ・何を言われてもカッとならず、冷静に対応する。適度に言葉を流すことを覚えた
- ・辛いことは逃げてでもいいんだと思えること

⑦自他関係の見方の変化

- ・無理に仲良くしなくてもいい、合う人がいると前向きに思えるようになった
- ・人の立場に立って考えられるようになった。
- ・世の中には合わない人がいると気付けた。そんな人でも付き合いえないことはない学ぶ
- ・人と協力することの大切さが身に染みてわかり、後輩へのアドバイスが出来た
- ・周りの人の支援に感謝の気持ちで一杯、他人を助けてあげたい

⑧将来像の明確化

- ・自分と同じような思いをしている子どもの、頑張っていること、得意なことを伸ばして自己肯定感を高めてあげたい
- ・将来の就職に向けて早く目標を持つとういう気持ちにさせた
- ・この経験があるからこそ、教師になったときに、辛い思いをしている子の力になりたいと強く思う
- ・自分の経験から得意なことをのぼす大切さを知っているので、子どもたちの立場になって、考えることができるようになる

次の③～⑥は、どのような領域で自身の成長や変化が表れているのかについて記したものであると解釈することができる。「乗り越えられなかった」体験を克服しようとする中で、現象の見方・とらえ方を相対化したり、視野の拡大や視点の転換を行うことの必要性に気づいたり、苦しい状況のただなかにあっても努力を継続することの大切さを再認識したり、がまんすることやへこたれない強さが身に備わったことを実感していることが、逆境への対処経験が現在の自分に「役立っている」と評価することに結びついているのであろう。⑦の「自他関係の見方の変化」は、「乗り越えられなかった」体験が自己の成長に貢献したという現時点における解釈が、対他者関係の質的転換にも結び付いていることを示唆している。

特筆されるのは、⑧「将来像の明確化」という分類カテゴリーが見いだされたことである。本調査の対象が教員養成学部学生であることから、将来目指す教師像との関わりから「乗り越えられなかった」体験を意味づける記述が散見されたことはある意味で自然なことであるのかも知れない。しかしながら、ここで注目されることは、「乗り越えられなかった」過去の体験

を大学生という現在の時点で振り返ったときに、その体験に対する自身の対処行動が現在の自分にとって役立ったと考えている以上に、学校教育教員という自身の将来像を明確にし、目指す教師像に引き寄せて考察している者が一部ではあるが見られたことである。このことは、場合によっては苦痛の連続であったかも知れない逆境という困難状況への対処経験が個としての人格の成長にとって有意味であったということだけではなく、実際に「乗り越えられなかった」体験を日々重ねている可能性のある「困り感」を持つ児童生徒にどのように向き合い、支援をしていくのかという、これからの教師に望まれる苦悩を抱えた児童生徒の気持ちに寄り添うことができる素養を身に付けることに結びつく可能性を示唆する。その意味で、「乗り越えられなかった」体験をどのように総括するのか、どのような意味づけを与えるのかについてじっくりと考察する経験は、自己の肯定的側面についての再認識だけではなく目指す教師像の明確化にもつながるという意味で、教職を志望する大学生には貴重な体験になると思われる。

考 察 及 び 今 後 の 課 題

本研究は、今後学校教育において児童生徒の成長を育む上で重視すべき資質能力の一つであるレジリエンスが、実際にどのような形成の過程をたどるのか、すなわち、どのような逆境状況に対してどのような対処行動が採用されているのかについて検討するために、大学生を対象として質問紙調査を行った結果を取り上げたものである。

その結果、下記のことが明らかにされた。

- ①教員養成学部学生が今までの人生の中で「乗り越えられなかった」できごとは、「部活動」と「受験・学習」に代表される学校生活に関する課題が半数を占め、続いて「自分の特性」や「友人関係」など、個人的な体験についても報告された。このことは、「乗り越えた」とする前回の調査（岡本・原田，2016）によるものと同じ傾向であり、教師として学生生活上の配慮事項に受験・学習関係は当然であるが、教育課程外とは言え「部活動」はかなりの比重があり、十分に配慮が必要な分野だと言える。
- ②教員養成学部学生が困難を乗り越えられなかった時の対応措置として、情動焦点型と問題焦点型の大きく二種類の対応に分類したが、情動焦点型と問題焦点型は、ほぼ同数であった。有効性についても、情動焦点型と問題焦点型での差異はみられず、どちらの手段が有益であるとの結論は導きだせなかったが、心の面で整理をつけることも、具体的な解決行動を取ることともに重要であると見て取れる。
- ③「その挫折が今の自分に役立っているか」は、圧倒的に「役立っている」と捉えている。教員志望者として、自分自身こそ挫折から立ち直り、次の課題に立ち向かっていく姿勢が何としても重要であるが、子どもの教育者である側面からも、子どもの挫折に寄り添い、支援できる教員として期待が持てる。「自分と同じ思いをしている子どもの、頑張っていること、得意なことを伸ばして自己肯定感を高めてあげたい」という学生のコメントからも伺える。教員養成学部学生を対象とした調査結果は、学生自身の状況把握でだけでなく、子どもに還元する力としても同時に捉えることが出来、学校教育の中で自信発揮する資質能力と深い関連性を持つことが示唆される。

これらの結果は、教員養成学部生にとって困難状況と認識されやすい課題は、家庭生活より、学業生活のような日常化された生活の中で生ずるできごとが多く、その克服に関して有力な方

略となっていたのは、とことん頑張らせることだけに捉われるのではなく、「できない自分を認めること」「別の道を考えること」も含めて柔軟な対応が功を奏していることを示している。特に、学習面にしろ、部活動にしろ、児童生徒の日常生活のうちで中心を占める学校生活に関わる困難体験を周囲の人間からのサポートを受けながら、同時に「上手に変更」し自分を守りながら、何とかして乗り越えてきた学生の姿を浮かび上がらせることができる。

また、今後の学校教育において児童生徒が身につけるべき資質能力としても、レジリエンスで言われているところの「楽観性」に通じるものがある。

最後に、今回示唆された調査結果を受講生に対して還元することが大事であり、また、教職科目の「生徒指導」や「教育相談」などの授業においても教材の一部として活用することを心がけたい。

文 献

- 岡本康哉・原田唯司 2017 教育学部生が自分の人生で乗り越えたことと、それを支えたと考えられる力 ～レジリエンスを巡って～ 静岡大学教育学部研究報告 67,171-181.
- 尾関由佳子・原口雅浩・津田彰 1994 大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析 The Japan Journal of Health Psychology 7 (2),20-36.
- 影山隆之・小林敏生・河島美枝子・金丸由希子 2004 勤労者のためのコーピング特性簡易尺度 (BSCP) の開発：信頼性・妥当性についての基礎的検討 産業衛生雑誌 46 (4), 103-114.
- カレン,ライビッチ 2015 レジリエンスの教科書 草思社
- 加藤司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究 48 (2),225-234.
- マイケル,ウインガー 2015 レジリアンスを育てよう 金剛出版
- 鈴木伸一 2004 三次元 (接近一回避、問題一情動、行動一認知) モデルによるコーピング分類の妥当性の検討 The Japan Journal of Health Psychology 74 (6),504-511.
- 内田香奈子・山崎勝之 2007 大学生用コーピング尺度の作成ならびに信頼性、妥当性の検討 パーソナリティ研究 16 (1),100-109.
- 内田香奈子・山崎勝之 2008 大学生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響の予測的研究 パーソナリティ研究 16 (3),378-387.
- 山崎勝之 2006 ポジティブ感情の役割 ―その現象と機序― パーソナリティ研究 14 (3),305-321